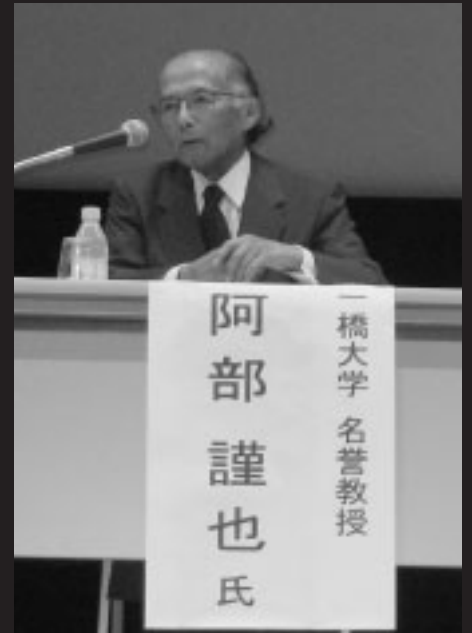
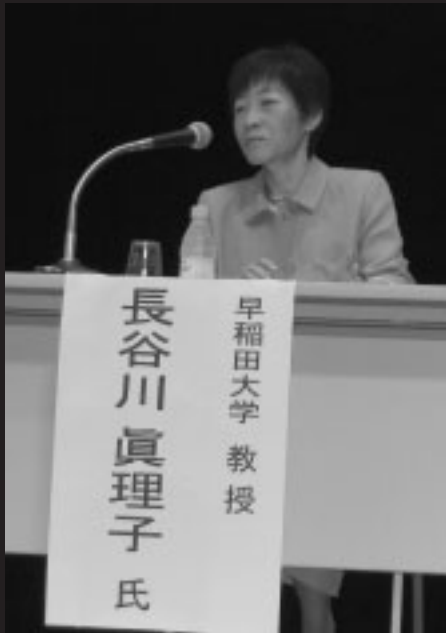


総合科学部創立30周年記念シンポジウム



ディスカッションするパネラー

(左から：加藤徹実行委員、佐藤正樹学部長、阿部謹也氏、瀨名秀明氏、長谷川真理子氏)



今年には総合科学部創立三十周年にあたり、これを記念して様々な式典・行事が行われた。記念式典を皮切りに、歴代総合科学部長座談会、近隣五ヶ所での一般向け公開講座などが催されている。そして最大の目玉と言えるのが、去る7月3日に各界の識者を招いて開かれた三十周年記念シンポジウムである。今回は、このシンポジウムが学生としての取材班の目にもどう映ったかを、事後の会談も交えて紹介する。なお、シンポジウムと講演の要旨については総合科学部ウェブサイト (http://home.hiroshima-u.ac.jp/souka/a_topics/30th/index10.htm)、シンポジウムの詳しい内容については、書物として発行される予定なので、興味のある方は参考にされたい。

シンポジウムの流れ

佐藤先生の基調講演の後、3人のパネラーによる単独講演が行われた。

佐藤先生は、『総合科学』の課題と可能性、阿部先生は「総合科学に限らず、日本の社会科学が前提にすべきこと」について述べられた。この中では佐藤先生と阿部先生の「総合科学」に対する認識の違いが示される一幕もあった。

続いて瀬名先生は「科学と小説の新しい関係」について示され、長谷川先生は「二十一世紀の科学リテラシー」についての見解を述べられた。その後パネラーによるデベート、質疑応答が行なわれ、幕引きとなった。

取材班の目

まずは、パネラーの単独講演について、取材班のメンバーそれぞれの思うところを述べていく。

佐藤正樹先生（広島大学 総合科学部長）

基調報告

「総合科学」の課題と可能性

【要旨】総合科学を「伝統的な人文・社会・自然の三科学の枠組にとらわれない、相互横断的な研究」と定義すると、一人総合科学と協同総合科学とに分類できる。

専門に固執せず、他分野にも出かけていくという手法が私の提唱する一人総合科学だ。物好きたる能力を培うもの、あるいはその能力自体を教養と呼びたい。ある問題を解決するためには、自分は何をなすべきかを洞察しなければならず、それを可能にするのが想像力である。想像力は教養なくしては発動しない。

近年は論文の本数で研究者を評価する業績主義が横行し、一人総合科学者の自己鍛錬に水をさしている。競争原理は必要だが、競争を数値の競争から解放するにはどうすればいいか、「総合科学」を可能にする鍵の一つは「ここにあるように思われる」。

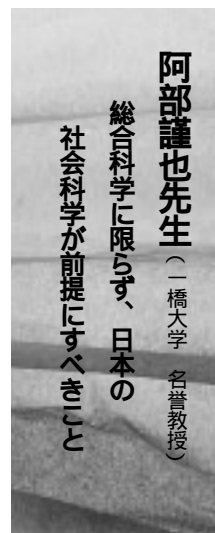
この報告の中でも特に関心を抱いたのが「総合科学の極意」という話題であった。

先生の言う総合科学の極意とは、「物好きであること」だった。総合科学は深い専門知識と広い見識を持つ者の営みであるが、それには膨大な知識と経験が要求される。これを得る過程は物好きでなければ耐えがたいものだろう。また、日本には専門外の事に意見する行為を慎む風潮があるが、物好きとしては積極的に意見すべきだとも言う。間違った意見をしたならば、その道の専門家に正してもらえば良い。そうすることで専門外のことも正確な知識が得られるのだ、と。

好奇心旺盛な者がよく成長するのは経験的に分かっていたが、まさに総合科学にも当てはまることだった。

これを含めて、一学生としてこの報告から得られたことは、これから如何に成長して行くかということだった。いずれ科学者を名乗れるだけの知識と経験を得て、再びこの報告に触れたときには、一人の総合科学者として歩むべき道が見えるだろう。

（甲斐）



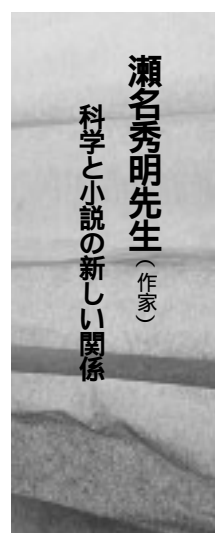
【要旨】日本の社会科学は明治以降欧米の学問を受容れて今日に至っている。学問とは日本ではせいぜい正確な知識と言った意味でしか理解されていないが、ヨーロッパでは宇宙を解明するための手法を意味していた。総合科学として諸学問は出発していたのだ。今私たちがなさねばならないのはヨーロッパの学問の特異な性格を知ることであり、総合科学に関しては日本社会の現状を踏まえてまったく新しい概念規定をすることだろう。私は日本の学問は全て総合科学でなければならぬと考えており、その原点に置かれるべきものとして、日本の過去の歴史と日本人の生活そのものなから私たちが創造しようとしている社会の像を創り上げることだと考えている。

ヨーロッパにとって、歴史とは、自然を脱ぎ捨てること。学問の目標とは、人間が最後は精神だけになること。

この二つのヨーロッパの考え方は、現代でも迷信の中で生きていけると言える多くの日本人にとって異質な考え方だと思う。どちらかと言えば、明治に入る以前までの日本の歴史の大部分では「人は自然と共生するもの」という考え方が主流であった。その長い歴史の中で築かれた人間観が、近代に入りヨーロッパ的な考え方が広まった現代でも日本人の精神の中には根強く残っているのではないだろうか。

私は、ヨーロッパの学問に対する考え方を、より正確に理解することも今後の日本の学問を発展させる上で必要だと考える。また、日本人独特の考え方による学問の新しい捉え方を模索するのも面白いのではないかとも思った。

(平井)



【要旨】私のような科学者が小説を書くときにフィクションとして面白くすることと科学とが共存するのは難しい。しかし難しいけれども面白いということが作り出せるのではないかと私は思う。これからは研究をしていくときにその動機付けを自分の中に見つけていくということが必要である。そして研究した事を「実装」、つまり抽象的な概念をシステムとして実社会で機能させていくことが重要である。そして総合科学部の一人一人には誇りを持って社会に「実装」して行く事が求められているのではないだろうか。

瀨名先生はかなり総合科学を実践している人ではないだろうか。薬学部生でありな

がら小説を書き、今もロボット工学を通じて人間を見つめ直し、小説に生かしている。このような文理融合した行いが今の社会に必要なのだろうか。

講演では、副題にあったように科学と小説の関係について話された。私は瀬名先生の著書であるパラサイト・イヴを読んだことがある。文面は専門用語が多く難しく感じたが、ストーリーは引き込まれるように面白かった。さらにその後はわからなかった事柄について知りたくなり、この分野に興味を持った。

つまり、難しいからこそ面白いということもあるのではないだろうか。これは、講演の中で先生がお話になったことでもある。もしこれが成り立つのなら、現在のいわゆる「理系離れ」を救う道になるかもしれない。

そして、最後に話された「実装」という言葉を私はとても重く受け止めた。これからの総合科学部において、私たちが何かを行うときに常に念頭におくべき言葉だと思う。

また、瀬名先生のご著書は新しい事を知るきっかけにもなるので、ぜひ読んでほしい。

(田中)

長谷川眞理子先生（早稲田大学 教授）
二十一世紀の科学リテラシー

【要旨】

最近の自然科学の発展は目を見張るものがあり、それに伴ってさまざまな技術が発明され、私たちの日常生活に浸透してきた。いまや、私たちは科学と技術を抜きにして暮らすことも、科学や技術を知らずに日常の判断を下すことも不可能であろう。

しかし細分化され、先端的に進んだ科学の大量の知識を熟知することはできない。

したがって二十一世紀の科学リテラシーとして、科学とはどんな営みであるのかを理解し、科学は、私たちにとってどんな意味があるのかを考え、科学の成果のよしあしを自ら選び取れる判断力を持つことが必要とされている。

講演の内容は、科学は単に事実の説明をするものであり、その是非を判断するのは人間である。二十一世紀はその能力が必要とされ、そのためには総合教育が必要である。また、成果のみを教え、その過程や実験の意味を教えない今の日本の理科教育は間違っている、というものだった。

思うに、真の民主主義には科学ジャーナリストの育成が必要ではないだろうか。先生は、科学の出した結果に対して是非を判断するのは人間で、それには総合教育が必要だとおっしゃって下さり、総合科学部の学生として嬉しく思った。

成果のみを教え、過程や意味を軽んじる理科教育は受験の影響が大きいと思う。受験のやり方を変えれば理科教育も変わるのではないだろうか。

(沖)

シンポジウムを終えて…

今回のシンポジウムは総合科学部三十周年を記念して、もう一度総合科学の必要性を問い直そうというものだった。しかし、私を見るところ学部長とパネラー御三方との間には見解の違いがあるように思えてならなかった。学部長は立場上どうしても総合科学部、あくまでも自分たちの学部的发展についてしゃべらねばならなかった。逆にパネラーの方々は総合科学という広い概念についてそれぞれの専門分野から述べられた。

シンポジウムを聞いて、たしかに阿部先生がおっしゃるように学問というのはすべて総合科学でなければならぬと思った。しかしそれはあくまでも自分の専門を持ち、それを突き詰めた結果専門だけに固執しすぎないように、また自分の専門だけではそれぞれの分野の連携が取れないから、あらゆる分野にある程度精通しておく必要がある、という意味であり、まったく専門を持たず、学問のほんの一部分だけを知っているに過ぎない私たちのような学生がはじめから総合科学をしようというのは無謀であ

るといった気がした。

このようなわが総合科学部の存在を否定するような気持ちはこのシンポジウムで学部長が一蹴してはくれまいかと期待したが、納得の得られるような話は聞けなかった。

しかし、学部長ならびに阿部先生がおっしゃった、学問はどれも大学四年間で完結できるものなどないし、学部ごとに自分たちのやるべきことははっきりしていると思っ

ているが、はっきりとしている学部などどこにもない、という言葉は胸に響いた。自分の所属する学部の目指すべき方向性がわからず、それを常に考えなければならぬ総合科学部の学生として、それが自覚できているだけでもすこしは総合科学的な広い視野を持っているのかもしれないと思えた。

(沖)

シンポジウム参加者の感想

凄く興味深かった。「総合科学」に対する自分のイメージとパネラーのイメージが異なっており、ハッとしました。(学生)

パネラー一人一人が言いたい事を判りやすく説明してくれた。(学生)

質問の時間が少し短かったのは残念だが、パネラーが知的好奇心溢れる頭の良い人達で良かった。(一般参加者)

普段聞けない人の話を身近で聞けて感動した。(一般参加者)

一般参加者も百名を超え、手応えを感じた。地域にも貢献できたのではないだろうか。(運営委員)

特別会談

シンポジウム終了後、取材班はパネラーの方々と会談する機会に恵まれた。そこで話題や、取材班メンバーが得た感想を紹介する。

このシンポジウムの特色は？

今回のように、文系理系・専門も違う人々が集まって話をするのは珍しい形式です。

ほとんどのシンポジウムは理系だけ文系だけなどのようにそれぞれの専門家たちが集まって、自分の意見を言い合って終わ

というのが多かった。つまり、それぞれの意見をつなげる仲介役のようなものがないかったのです。その意見をつなげるにはやはり総合教育が必要です。総合科学の重要性が大きいということですね。

「学問」についてどうお考えですか？

学問にはつきりとした定義などありません。例えば、「ロボット工学」にすらはつきりとした定義がありません（そもそも「ロボット」の定義がありません）。わからないものを学ぶから面白いのです。

大学を面白くするには？

面白くする工夫は学生から提示しなければなりません。受身でいたのでは絶対にダメです。まず自分たちから行動を起こして下さい。

会談を通じて

シンポジウムの後、我々は幸運なことにパネラーの方々と長時間（一時間半ほど）話をする機会を得た。シンポジウムではパネラーと私たちの間には見えない壁があり、

なんとなく雲の上の人々という気がしていたが、じかに話をしてみるとやはり親近感が湧いてきた。しかし、われわれの準備が悪くパネラーの方々に逆インタビューされてしまう羽目になってしまい、反省させられた。

会談でもっとも心に響いたのは阿部先生の「大学は学生がつくるものだ」という言葉だった。今の我々はただ大学側が用意したカリキュラムに従っているだけである。こんな受身な姿勢では良い大学はできない。わが大学のある教授も「学生が教員に対していろいろと質問することによって、良い教員ができる。」とおっしゃっていた。もっともである。教員のいうことをただ単にうのみに行っているだけでは、我々学生がどんなことに興味関心があるのか、どんなところがわからないのかということが一向に教員側には伝わらない。これではお互いが高めあうことは難しいだろう。まず、このような受身な姿勢を我々が変わることが学生と教員が互いに高めあえる大学づくりの第一歩であると痛感した。

ただ、すべての部分に頷けたわけではない。会談に同席した友人がこう言っていた。「たしかにパネラーの方々のお話は正論だ

し、魅力的だった。しかし、どこか現実味が無いように聞こえる。なぜなら私たちのような庶民を内容の対象にしていないからだ。」

個人的にはこの意見に賛同したい。たしかにパネラーの方々の意見や考え方は素晴らしいと思うし、もっともだと思う。しかし、どこか私たちのような庶民を話の対象にしていないような気がしてならなかった。彼等の話に出てくるのは東京大学・京都大学・ハーバード大学など超名門校ばかりで、私たちが考えるような普通の大学はひとつも出てこなかった。これは今の日本社会にも言えることだと思う。官僚など、一部のエリート層が我々庶民のことを考えていないために様々な問題が生じている。シンポジウムもそうだったが、ここでもそのような日本社会の負の部分を見たような気がして、少し憤りを感じた。

(沖)

今までの教養と若者、真の教養とは

パネラーの方々と直に話をした中で私が最も印象に残った話題は、「教養」の共有についての話題である。長谷川氏に最近の学生と昔の学生の違いについて意見を求めたとき、次のような答えが返ってきた。

「最近の学生の特徴は、私たちが教養と呼んできたものを全く知らないという点だ。」

ここでいう「教養」とは、例えばカントやダンテなどの著書や、日本の近代文学者などの本に対する知識・理解をいう。なるほど、私たちの多くは、それらの文献を読もうとしないし、知ろうともしない。長谷川氏や瀬名氏の時代までは、これらの教養はファッションに近く、教養に対しての無知は恥ずかしいことであった。ところが最近の学生は、教養がないことに対して恥ずかしいと思う感覚を持たない。講義中に長谷川氏は、何か例えを用いて表現しようとする時、当然知っているであろうと思われる文学者の著書を挙げて、「？」という表情をする私たちを見ると、寂しい気持ちになるという。

今までの時代を生きてきた知識人は、話をしたり意見交換をしたりする際、「教養」と呼ばれる知識を互いに共有していた。そのため、世代が違っていてもそれらの教養をベースとすることで、相互理解がうまくいっていた。従って、現在に至るまで教養は、世代から世代への学問の継承においても大きな役割を果たしてきたと考えられる。

ところが現在、多くの若者はそれらの教養を重要視していない。現在、若者間においては、今までの教養に変わる新しい知識のベースが存在するからだ。例えばそれは、現代小説であったり、音楽であったり、メディアアから得る知識・情報である。若者間における相互理解は、それらの知識の共有だけで十分うまくいっているのだ。ところが今の若者と年長者の間には、会話のベースとなる共通の知識が存在しないため、世代を超えた相互理解が今までのようにうまくいっていない。結果、学問の継承においても、教える側と学生の間には「教養」の共有に断絶が生じているため、継承されにくい状態となっている。

私たち若者は、これからの日本を、そして世界を背負っていかなければならない。人類の歴史を通して継承され発展してきた

学問を受け継ぎ、さらに発展させることは、人類が現在抱えている諸問題や、これから生じるであろうさまざまな問題を解決してゆく上で必須であろう。従って、「教養」の共有の断絶によって学問の継承に障害が生じているという今の日本の状態は、将来を考えると危機的な状態なのかもしれない。こういった状態から抜け出すには、やはり若者と年長者の相互の歩みよりが必要となってくるのではないだろうか。そのためには、

年長者と話していると、突然出てくる「教養」に戸惑いを感じたまま聞き流すことをやめ、何を相手は伝えたいのかを知ろうと努める姿勢が私たち若者には必要であるし、年長者も若者と話す上では、「教養」とは誰もが知っているもので、知らないことは恥だという観念を捨て、より若者に理解されるだろう新しい伝え方を模索する必要があると私は考える。

「教養」の共有の話題が出た時、阿部氏は既に退席されていたが、もしも彼があの場にいたら議論は全く違う方向に進んでいたと考えられる。

「真の教養とは、社会の中に生きている人間として、自分の人生と言うものが、あるいは現在の仕事や、社会とどのようにつ

ながっているかを自覚している、あるいは十分に解らなくても、解ろうと努力している状態のことだ」

これは、阿部謹也氏が著書「日本人はいかに生きるべきか」で述べられている言葉である。教養がある人とは、たくさんの書物を読んでいて、読み書きが堪能で、いわゆる物知りな人を指すことは間違っている」と、阿部氏は考えている。

自分の生き方や、企業のあり方、社会が進む方向について、今までの価値観が揺らぎ、新しい動きが生じつつある現代、自分の原点を探る道標として「教養」の重要性は教育やビジネスの場で真剣に語られつつある。阿部氏が言うには、教養には「個人の教養」と「集団の教養」があり、「個人の教養」とは、個人が「いかに生きるか」という問いを自分自身に対して発すること、それに対して「集団の教養」は、一般の生活の中に根付いている知恵とか、人間同士の絆のようなものを指す。これまでは、教養は前者の意味でしか捉えられない傾向が強かった。しかし、個人のみの教養は、集団から離れていってしまう危険がある。私たちは、社会の中に生きていることを自覚し、集団の教養についても再認識する必要

があるのだ。

これから時代が進むにつれ、「教養」の定義は変わり続けていくだろうが、阿部氏の言う真の教養を得るためには、私たちは自分たちの住む社会のさまざまな問題や変化に目を向け続け、自分と社会の関係を見つめ続ける必要があるだろう。

(平井)

若者へ一言

最後に、パネラーの方々から若者へ向けてのメッセージを頂いたので紹介しよう。

長谷川先生

個性と多様性を大事にしつつ、勇気という言葉に意義を見出して下さい。

瀬名先生

今、本当に読んでいる本、聴いている音楽、観ている映画、付き合っている人、そういう人達が実は十年後、二十年後の自分の仕事の核になっていくということが、十年後、二十年後に分かるのではないかなと

思います。

阿部先生

大学時代に、お金とか名誉とか地位というものに関係がない価値があるということをも、もし、ほんのちょっとでもいいから知って卒業できたら、その人の一生は非常に未来あるものじゃないかなと思います。

佐藤学部長

自分が出来ないことをやっている人は、尊敬は出来なくても良いから、一目置くぐらいの余裕を持って下さい。これからも一緒に勉強しましょう。

(沖宗一郎、田中栄一郎)

平井友子、甲斐章嗣